

るべきだ」と将兵はいきり立ち、なお陣地の構築をやめなかった。しばらくして、満州、朝鮮、南樺太の日本軍はソ連に降伏するよう、ルーズベルト大統領命令が大本営を通じて新京の関東軍司令部に伝達されたという情報が輜重隊にも伝わってきた。

関東軍は過去二十六年間、心血を注ぎ北方よりの侵攻を阻止していたのに、戦力を発揮できぬ間に壊滅するのかと思うと、今まで張り詰めていた戦意は、つぶれた風船玉のように全身からすーっと抜けていく衝動にとりつかれた。不安が心臓にじわりじわり広がって、次第に昂じてくると、「銃殺される」という幻想が頭をもたげてきた。三々五々、兵も、下士官も、将校も、どっかと草むらの中に倒れるようにへたばってしまった。心なしか顔色を失っていた我が中隊長は「ソ連軍の指示あるまで現地に待機することになった」と力ない声で全兵に伝えた。これからどうなるだろう。なすこともなく不安な日が続いた。

二十四日朝、横道河子を出発するという命令が下され、同時に武装解除された。三八式小銃、帯剣、手榴

弾、短銃、軍刀、機関銃、軍馬などが、ソ連将校立ち会いのもとに野営地の近くの広場に集積された。

我々は丸腰で出発した。横道河子、道林、山市、海林を経て、行軍また行軍の末、牡丹江省寧安県拉古に到着。拉古には日本軍の兵舎があつて無傷で残つており、臨時野戦病院も併置してあつた。ドイツ降伏後、満を持していたソ連極東軍総兵力百六十万余、米軍が長崎に原子爆弾を投下した八月九日早朝攻撃を開始し、わずか一週間で満州に駐屯している四十万余（三十万は南方に転属）の兵を制圧、二十六年間の歴史を持つ関東軍はあっけなくつぶれ、在満百五十万人の日本民間人は、血と肉と汗で築き上げた全財産をソ連軍に蹂躪されたのである。

## 五十年前のシベリア抑留に思う

沖繩県 当 銘 三 郎

去る第二次世界大戦、太平洋戦争で我が国は米ソに

敗戦し、無条件降伏をした。

私も関東軍は満州で武装解除し、ソ連軍の捕虜となった。五十万人の関東軍兵士達は、シベリアのナホトカ港より帰国させるからと背後より着剣した銃を突きつけられて、十日間の行軍でソ連領へ到着した。帰国とは真つ赤なうそ偽りで、到着と同時に重労働を強制された。

労働をするにも前後左右、着剣のソ連兵に監視され、奴隷扱いで、敗戦国民の惨めさが骨の髄までしみた。このような過酷な労働に耐えること五年、出征して十年目の冬、夢のような帰国を果たし、肉親に迎えられる、厳格な父と抱き合い、しばらくは言葉すら出さず、お互いにこの無事を喜び涙を流すばかりだった。

戦争を直接体験した生き証人の私もは、戦争の残酷さ、愚かさ、人命を虫けら同様にされたむごたらしさを後世に伝え、恒久平和実現への願いを働きかけることが亡き戦友への償いにもなると考えている。また、戦後五十年余を迎えた今、大正、昭和初期の人達が年々減ってしまい、戦争の語り部がますますいなく

なる点からも、ぜひ自分の体験を伝えるべきと考え、ソ連抑留体験の一部を記す。

私は、昭和十七年（二十一歳）一月十日、入隊。以来、ソ満国境守備隊に服していた。当時、太平洋戦争は日々悪化するばかりで、軍事訓練はますます強化された。

訓練には、箱爆弾を背負い、壕の中から飛び出て敵の戦車目がけて自爆を完遂する訓練があった。また消防の車庫に閉じ込められ、防毒マスクで武装し催涙ガスの中で耐える訓練など、思い出すだけでも身震いをする。

そのころ米軍は、こともあろうに史上最悪の原子爆弾を昭和二十年八月六日広島に投下し、多くの人命を奪った。同年八月九日には長崎へ投下し、全体を一瞬のうちに灰にってしまった。ソ連軍は、その情報で日本軍の敗戦を見抜いて、満州の関東軍へ宣戦布告し攻めてきた。もはや日本軍は敗北宣言をせざるを得なくなり、昭和二十年八月十五日、大本営発表、昭和天皇は日本国民に対し「耐え難きを耐え、忍び難きを忍

び」、日本国は連合国に対し無条件降伏を宣言する旨  
放送した。

その日、東京湾の米国戦艦ミズーリ号上で降伏文書  
に調印し、各戦地に武装解除令がしかれた。連合国四  
カ国（米、英、仏、ソ）はドイツの郊外でポツダム宣  
言協定に調印。武装解除後、日本兵士は強制労働させ  
ずに即時故郷へ帰国させるとの協定の内容であった。

しかし、「鉄のカーテン」に代表されるスターリン  
は、我々日本兵士五十万人に戦争終結後も労働を強要  
した。労働は、山奥の原生林の伐採作業や石炭掘りや  
船の横腹の板金張りかえ等、現代の若者達には耐えき  
れない大変な重労働であった。仕事が厳しいばかり  
か、気候は夏は三カ月だけ、残り九カ月が零下三十五  
度以上四十二度の極寒地での作業であった。さらに食  
事と言えば、一日に百五十グラムのパン（食パン三枚  
ぐらい）食に塩味だけのスープであったり、朝昼晩と  
も大豆汁だけのときには、三日間、全員がひどい下痢  
をして死にそうだった。「これが食事か、我々は牛馬  
以下の扱いだ」「いつ死ぬかわからない」「腹いっぱい

のポタ餅を食べれば死んでもいい」とまで言うほどで  
あった。あまりにも粗末過ぎる食事に栄養失調で死亡  
し、異国の地に骨を埋め、祖国の肉親に別れすら告げ  
られない気の毒な戦友は五万人から六万人もいると聞  
かされた。

そんな状況下でもソ連軍は、「ヤボンスキー・スコ  
ーラ・ダモイ（一生懸命働けば早く国へ帰すとの意  
味）」と我々をだまし続けたものであった。当時の抑  
留生活は、日本の昔の炭坑労働者のタコ部屋の奴隷の  
生活同様であった。また、沖繩の浦添市出身の戦友が  
あまりにも骨皮で包んだようにやせ細ったため帰国が  
決まったときに、彼は「沖繩に帰れるだろうか」と涙  
ながらに語っていた。あの姿は今でも鮮明に覚えてい  
る。

戦争は同じ人間同士が銃を向け合い殺し合う、非人  
間的行為である。特に沖繩戦の人的犠牲の大きさはは  
かり知れない。二十三万余の方々が戦死されたことを  
思うと、二度と戦争を起こしてはならない。南部にあ  
る平和公園での平和の祈りは、世界の恒久平和への誓

いを新たにしている。沖繩戦で味わった苦い苦い太平洋戦争の体験を肝に銘じて、国境を越えた世界のウチナンチュ大会に見る心豊かな平和時代の繁栄を願ってやまない。